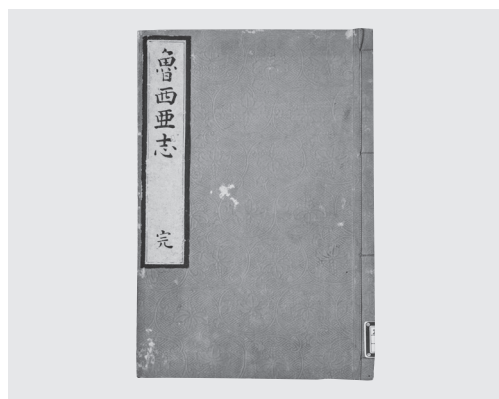


海防地理書『三国通覧図説』や、同じく林が天明六（1786）年に成稿し、寛政三（1791）年に版行した海防論『海国兵談』を、世を乱す妄説として版木を没収し、林を禁固刑に処していました。翌年、林が失意のうちに死去すると、皮肉にもロシアからエカテリーナ2世が派遣した使節アダム・ラクスマンが根室に来航して、松平は自ら江戸近辺の諸藩の海岸防備の実情を視察し、対応に迫られることになります。

寛政五（1793）年三月、幕府は目付の石川忠房らを松前に派遣して、六月にラクスマンと会談させます。石川は彼が要求した通商関係の樹立を、国是とする鎖国を理由にして断りますが、ロシアに滞在していた大黒屋光太夫と磯吉の2名の漂流民の帰国は受け入れました。鎖国体制が完成した江戸時代初期では考えられなかったことですが、外国からの帰国者を死罪とせず、彼らを情報源としてロシアの最新の状況を把握しようとしていた幕府の政策の変化が見て取れます。この年の秋、大黒屋と磯吉は江戸へ送られ、吹上園において將軍徳川家斉や幕閣が列席する中で、桂川が主導する取り調べを受けることとなります。

### ■尋問前の予備知識としての『魯西亞志』

桂川は幕府から2人を尋問する命を受けた時点で、急遽、準備にとりかかり、自らのロシアに関する知識を高めようとしていました。これはロシアという国の全体像を把握することに重点をおいたようです。そのため、地誌の翻訳を手掛けることとし、その対象となったのが蘭書であるヨハン・ヒュブネルの著書『一般地理学』（アムステルダム、1769）でした。桂川は寛政五（1793）年の一月に本書のうちのロシア地誌に関する部分の抄訳にかかり、僅か11日間で『魯西亞志』として脱稿したといえます。<sup>(3)</sup>



桂川甫周訳『魯西亞志』写本 寛政五（1793）年

内容はロシアの国名から始まり、位置、面積、他国との境界、河川、風土、行政、生産物、政治、兵制、交易などから成っています。また、後半部分からは「魯西韃靼」として、ロシアのシベリア部分が説明されています。

本書は作られた目的からすれば版本にする性質のものではなく、この尋問の終了後に書写され流布したものと考えられます。本学図書館の所蔵本も同年のものです。

### ■『漂民御覧〔之〕記』とは

桂川はこのような予備知識の蓄積をもとに尋問を進め、同時に取り調べの記録を残しました。『漂民御覧〔之〕記』は尋問の様子を纏めたもので、書名の一部の「御覧」は將軍徳川家斉の前で行われたことを意味します。



桂川国瑞（甫周）著『漂民御覧〔之〕記』写本 寛政六（1794）年